



Title	『列女伝』の女性たち：鄒の孟軻の母
Author(s)	宮本，勝
Citation	語学文学，25：37-46
Issue Date	1987
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8396
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

『列女伝』の女性たち —— 鄒の孟軻の母 ——

宮 本 勝

『列女伝』は、前漢・劉向（前七九年～前八年）の編纂した書で、中国古代——主に、上古から春秋戦国時代にかけての女性の伝記集である。その言行や事績の内容によって、母儀伝・賢明伝・仁智伝・貞順伝・節義伝・弁通伝・孽嬖（寵妾）伝の七巻に分けられ、各巻一五伝、ただし、第一巻は一伝を失っているので、都合、一〇四伝が収められている。

劉向は漢の皇族で、成帝のとき、後宮が乱れその秩序を正すために、古書の中から、手本や戒めとすべき女性の伝記を集めて天子を戒めたものがこの書であり、以後、後宮婦人の道德涵養のための教科書の役割りを果たした。

鄒の孟軻の母

（第一巻母儀伝）

戦国時代の儒家思想家・孟子の母の逸話である。鄒は孟子の出身地で、もともと春秋戦国時代の邾国で魯に近く、魯に併せられたと

も、楚に併せられたともいわれる（趙岐「孟子題字」）。今の山東省鄒県のあたりである。

「鄒孟軻母」は『列女伝』の中でも長編で、全体は四話から成っており、第一話は孟子の幼年時代、第二話は志学の少年時代、第三話は而立の青年時代、第四話は仕官後の壮年時代というように一定の構成をもっている。これは、それぞれに伝えられていたものになる説話があつて、劉向はそれに手を加えて整理・構成したものであると思われる。

〈第一話〉

鄒の孟軻の母なり。孟母と号す。其の舎（住居）墓に近し。孟子の少きとき、嬉遊するに墓間の事を為し、踴躍築埋（泣き伏したり土まんじゆうを築いたり）す。孟母曰く、「此れ、吾の、子を居処せしむる所以（落着いて住まわせる環境）に非ざるなり」と。乃ち去り、市の傍に舎す。其の嬉戯するに賈人衒売（商人物

売り)の事を為す。孟母 又、曰く、「此れ、吾の、子を居処せしむる所以に非ざるなり」と。復、徙りて学宮(学校)の傍に舎す。其の嬉遊するに乃ち俎豆(祭器、御供物台とたつき)を設け、揖讓進退(挨拶してへり下る動作)す。孟母曰く、「真に以て吾が子を居らしむべし」と。遂に之に居る。孟子 長ずるに及び、六芸(儒家の六種の經典)を学び、卒に大儒の名を成す。

君子(世の識者)謂ふ、孟母 善く漸を以て化す(次第に教化した)。詩に云ふ、「彼の妹たる(素直な)子、何を以て之に子へん」と。此の謂なり。

この話は、所謂「孟母三遷の教え」で、人口に膾炙している。賢母説話の代表で、我が国にも古くから伝えられている。文献に残されたものとしては『列女伝』が初めて他書には見られない。しかし、劉向の全くの創作というわけではないであろう。第二話や第三話では、モチーフの共通した説話が『列女伝』より時代が古い文献にも見えているから、第一話も同様にこれに類似する何らかの説話が伝えられている、それに劉向が手を加えて孟母の物語に仕立てあげたのにちがいない。

漢代は、いうまでもなく儒教社会の成立した時期であり、儒教の主要經典・五經の權威がゆるぎなく確立すると同時に、『論語』や『孟子』も非常によく読まれていて、五經に準ずる地位を得ていた。賢者・孟子に対する尊崇の念も昂まるにつれて、孟子説話もさまざまな形で語り継がれていたと思われる、それらの中から劉向は「三遷」のモチーフを借りて、幼児の教育環境や人間形成に大きな影響を与えた母親像をここで描き出したかったにちがいない。

『列女伝』は、当時、次第に衰退に向かっていた漢王朝・劉氏政権を内から支えるべき女性——いわば儒教社会における期待される女性像を提示することに、その著作の目的があった。しかしそこに描き出されたのは、ひたすら従順貞淑に婦人の礼節を守って隠忍するというような、すぐに想像しがちな図ではなかった。もちろん、『列女伝』の女性たちにも強く要求されるのは「礼節」であり、その礼節とは、当時の帝室や支配階級が自らの権力を維持するために必要な道德規範であり、これを男女の關係で把握すれば、女性の、男性に対する隷属を求める儒教倫理であることには変りない。だが、社会的退勢に歯止めをかけ、一転、興隆を冀う劉向の筆は、儒教倫理におしひしがれ、唯々として男性に奉仕する女性像は描かなかつた。消極的な忍従の女性ではその意図を達することはできない。積極的かつ能動的に「礼節」を鼓吹する強いエネルギーが必要なのである。かくて『列女伝』の女性は、この「礼節」を守ることにかけてはまことに果敢で、時には命を投げうち、母子・夫婦の情愛を絶ち切つても礼節に拘泥する、すさまじくも壮絶な女性像が描き出された。宋・王安石が、「劉向は狂女を述べて書を成した」(宋・王回「古列女伝序」に引くことば)と譏るほど、この女性たちは狷介であり、それが、かえって生き生きと個性あふれる姿態で『列女伝』の中に躍っている所以なのである。

「孟母三遷」においても、女性や母性の持つエネルギーが過剰なまでに発散して、それを受けとめる男性の存在が全く稀薄である。孟母の直截な判断力と果敢な行動力とによって、孟子はまるで人形のように母親の自在な意志に操られている。特に注意を促したいのは、

孟母の夫、孟子の父親の姿が、その影すら見えず勾いもしないことである。孟母の強烈な母徳が、この説話から全く父親像を消してしまったのも、劉向の、期待する母親像を求めるあまりの筆の上であった。しかし、これがあまりにも迫真力を持って語られたがために、後世、「孟子 三歳にして父を喪う」という伝説を生ぜしめたことは後段に詳述する。

〈第二話〉

孟子の少きとき、既に学びしに帰る(中途で帰省した)。孟母方に續ぐ。問ひて曰く、「学 何の至る所ぞ」と。孟子曰く、「自若たり(相変らずです)」と。孟母 刀を以て其の織を断つ。孟子 懼れて其の故を問ふ。孟母曰く、「子の学を廢するは、吾の斯の織を断つが若きなり。夫れ君子は学んで以て名を立て、問ひて則ち知を広む。是を以て居れば則ち安寧にして、動けば則ち害より遠ざかる。今にして之を廢するは、是れ廝役(小者)を免れず、以て禍患を離ること無からん。何を以て織績し食する(食事の仕度)に異ならんや。中道に(途中で)廢して為さざらんば、寧んぞ能く其の夫子(おつと)に衣せて、長に糧食に乏しからざらしめんや。女は則ち其の食する所を廢し、男は則ち徳を修むるを墮らば、窃盜と為らざらんば則ち虜役(召使)と為らん」と。孟子 懼れ、旦夕、学に勤めて息まず、子思(孔子の孫・孔伋の字)に師事し、遂に天下の名儒と成る。

君子謂ふ、孟母 人の母たるの道を知る。詩に云ふ、「彼の妹たる子、何を以て之に告げん」と。此の謂なり。

この話は、所謂「孟母断機の教え」としてよく知られる。明・呂元善『聖門志』は、「孟子は十五歳で魯に就学した」と述べている。もとより根拠はないが、劉向も、十五歳志学の年ごろの孟子を念頭に想い浮かべていたかも知れない。

この説話は、『列女伝』より前に成立した『韓詩外伝』巻九に次のように見えている。

孟子 少き時、誦す(經典を暗誦していた)。其の母 方に織る。孟(子) 輟然として中止し、乃ち復、進む。其の母 其の誼るるを知るなり。呼びて之を問ひて曰く、「何為れぞ中止するや」と。対へて曰く、「失ふ所有りて、復、得たり」と。其の母 刀を引きて其の織を裂き、此を以て之を誡む。是れより後、孟子 復、誼れず。

清・崔述『孟子事實録』巻上は、二つの「孟母断機」を比べて、「自らその織布を裂いて学問の中断してはならぬことを諭えるのは、理としてまことに当然である。しかし、經典は、かつ誦しかつ思うもので、中止の時の無いはずはなく、誦声の途絶えることなく続くのをむやみに求めるのは極端だ」と論じて、『韓詩外伝』の「断機」を斥けている。たしかにヒステリックで説得力が無く、「断機」の諭えも生きていない。しかし、「三遷」にしろ「断機」にしろ、実話でないにしても、孟子の母親は、孟子の人間形成に何らかの形で大きな影響を与えたからこそこのような説話が生れたものと考えられるのであるが、そうだとすれば孟母の実像としては、『韓詩外伝』の方があられるいは近いのかも知れない。ヒステリックな教育ママにしごかれる孟軻少年――。

『韓詩外伝』巻九はまた、「孟子の幼いときのこと、隣家で豚を殺しているのを見て、『何のためですか』と母に尋ねたところ、母は、『おまえに食べさせるためだよ』と答えてしまつてからすぐに後悔し、『私はこの子を懐妊してからというもの、敷物は真直ぐでなければ坐らず、食事は調理が正しくなければ食べないというように胎教にこれ努めて来たのに、それが今、もの心の付いた子を欺くのは教えに不信を抱かせることになる』と考へて、隣家から豚肉を買つて子に食べさせ、欺いたわけでないことを示した」といふ説話も伝えている。日常の会話でよく行われる軽い微笑ましい戯れを、孟母の善教に牽強附会するのはいかにも無稽で、劉向もこの説話は『列女伝』に採っていない。ただ、この説話と内容の非常に似ているものが『韓非子』外儲説篇がいろよせつにあり、そこでは、孟子の母ではなく、曾子の妻の話となつているから、特に孟母ということではなく、賢母の善教を語る一つのパターンとして、豚肉を子に食べさせるモチーフがあつたのかも知れない。

これらの『韓詩外伝』の説話に比べて『列女伝』の「孟母断機」においては、女の丹精こめた織布をすばつと刀で裂いて孟子を慄然と懼れしめ、然る後、学問の中断すべからざることを淳々と説き明かす態度は、いかにも冷静で威厳に満ちており、崔述も言う如く、「断機」の喩えが非常に効果的である。当時の織機も今の手織り機と原理の上ではさほどの違いは無いとすれば、縦糸を機にセツトし、それに横糸を織り込んでゆく。一度セツトした縦糸が切れたなら、もう布は仕上らず、織つてきたこれまでの苦労は水泡に帰してしまふ。この縦糸を「経」といい、横糸は「緯」という。「経」は転じて、物

事を真直ぐに貫いて変わることのない普遍的道理を意味する。「経」はまことに「織りの命」なのである。これを断ち切つてまでして教えたその毅然とした強い意志が読者に伝つて迫真の効果をもたらす。『韓詩外伝』の「断機」のモチーフを活かして、「暗誦の中止」を「学問の中断」に置き換えたのは、おそらく劉向の手にかつたものと思われるが、これによつてこの説話は生き生きと精彩を帯び、沈毅果敢な孟母像が眼前に浮かび上がってくるわけである。しかし、そのためにここでもまた、孟子の父親は後方に退いてその姿影は希薄になり（しかも文中に「夫子」の語が見えるのに——）、第一話の「孟母三遷」によつて生じた「三歳喪父」説を助長することになるのである。

〈第三話〉

孟子 既に娶る。將に私室に入らんとするに、其の婦 袒にして内に在り。孟子 悦ばず、遂に去つて入らず。婦 孟母に辞あつか与らず。と。今、妾 窃かに墮りて室に在り。而して夫子妾を見て、勃然として悦ばず。是れ妾を客とする（他人扱い）なり。婦人の義、蓋し客宿せず（よその家には泊らない）。請ふ、父母に帰らんと。是に於て、孟母 孟子を召して之に謂ひて曰く、「夫れ、礼に、將に門に入らんとするや、孰れか存するやと問ふ、敬を致す所以なり。將に堂に上らんとするや、声、必ず揚ぐ、人を戒むる所以なり。將に戸に入らんとするや、視、必ず下す、人の過ちを見んことを恐るればなり。今、子 礼を察せずして、礼を

人に責む。亦、遠からずや」と。孟子 謝して遂に其の婦を留む。

君子謂ふ、孟母 礼を知り、而も姑母の道に明らかなり。

この話もこのあとの第四話も「孟母三遷」や「孟母断機」に比べる
とあまり知られていない孟母説話である。

第三話はまた『韓詩外伝』巻九に次のように見える。

孟子の妻 独り居りて踞(たてひざ)す。孟子 戸に入りて之
を視る。其の母に白して曰く、「婦、礼無し。請ふ、之を去らん」
と。母曰く、「何ゆえなるや」と。曰く、「踞すればなり」と。
曰く、「何ぞ之を知るや」と。孟子曰く、「我 親(みづか)ら之を見たり」
と。母曰く、「乃ち汝 礼無きなり。婦 礼無きに非ず。礼に云
はずや、『将に門に入らんとすれば、孰(た)れか存するやと問ふ。将
に堂に上らんとすれば、声 必ず揚ぐ。将に戸に入らんとすれ
ば、視 必ず下す』(『礼記』曲礼上)と。人の不備を掩はざれ
ばなり。今、汝 燕私(ひとりくつろぎ)の処に往き、戸に入り
て声有らず、人をして踞せしめて之を視る。是れ汝の礼無きな
り。婦の礼無きに非ざるなり」と。是に於いて、孟子 自ら責め、
敢へて婦を出ださす。

孟母が、婦の袒(はだぬぎ)あるいは踞(たてひざ)をとがめず、
かえつて孟子の無礼を責めて教えさすという点では、『列女伝』
『韓詩外伝』両者共通している。賢母・孟母の、礼法に通曉している
ことを語る逸話であるけれども、ひととき私室にほつとくつろぐ嫁
と、その女としてのしどけなさを弁解してやる姑の思いやり――、
大家族制の中における嫁と姑の姿が垣間見られて面白い。

しかし、ここで注目したいのは、孟子の妻の態度における両者の

相違である。『韓詩外伝』では、妻はおそらく恐懼謹慎して後方に控
えているであろう様子が眼に浮かぶ。妻の無礼をとがめてただちに
離縁しようとする、これは夫婦関係における夫側の礼法原理を、孟
子は当然の権利として主張したに過ぎない。当時は、離縁は完全に
夫側の持つ権利で、これを「七去」あるいは「七出」といい、『大戴
礼記』に、「父母に従はざるは去る。子無きは去る。淫は去る。妬は
去る。悪疾有るは去る。多言は去る。窃盗は去る」(本命篇)とある
とおりである。しかし、反対に夫の欠点・悪行を理由にして婦側から
離縁を申し出たり婚家を去ることは適わなかった。「夫に悪行有る
も、妻は去ることを得ず」(『白虎通』嫁娶篇)。

妻の「踞」は七去に該当しないけれども、いったん七去が社会通念
として認知されると、これをもとにしていくらでも拡大していくこ
とが可能である。たとえば――、曾子は藜蒸(あかざのむし物)が
生煮えだったために妻を離縁しようとしたところ、ある人が七出に
当たらないと言つてとりなしたけれども、曾子は、「藜蒸は小物なる
も、吾 熟せしめんと欲するに、吾が命を用ひず。況んや大事をや」
といつて遂に妻を出した(『孔子家語』巻九・弟子解)、というよう
に。

『韓詩外伝』が、夫の権利である七去の(あるいはそれに準ずる)
礼法を妻に一方的に露(あらわ)に突き付けているのに対して、『列女伝』の方
の孟子の妻は、「夫婦の道、私室は与らず」「婦人の義、蓋し客宿せ
ず」と、明確な主張を展開して夫とわたりあっている。しかも、「請
ふ、父母に帰らん」と、妻の側から言ふことは礼法に違反するはずの
申し入れをして、いかにも『列女伝』の女性らしい強烈な個性を発揮

している。

『列女伝』の女性は、孽(げつ)壁(べい)伝(でん)を除いて、儒教倫理の擁護者として登場するが、しかし教条主義者ではない。例えば、夫が外で妾を囲い金品を貢いで妻を顧なくなったけれども、「婦人に七つの去らるる有るも、夫に一の去る義無し」と、七去の道(その逆の妻の立場)を頑なに守り通した女性が一方にはいる(卷二・賢明伝・宋鮑女宗)。これは、劉向の、婦人は七去を遵守すべきであるという倫理観の表われである。しかし、これが、教条主義的に、常に要求されるかという点、そうではない。陶の荅(とう)子(し)の妻は、夫が大夫の地位を利用して私腹を肥やしているのを、そのような行いは必ず禍いを招き家を滅ぼすとして、姑に逆らって末の子を抱いて家を出た。果して荅子一族は盗の罪によって誅滅されたが、姑だけは老をもって免れたので、荅子の妻は子と共に戻って姑を養い天寿を全うさせた(卷二・賢明伝)。七去の道を犯して孝養を全うしたのである。ここでは、七去と孝養とが徳目として平衡に並んでいるのではなく、重層的なのである。孝養を遂げることを主題として設定した話においては七去に抵触しても許されるわけであり、その方がかえって主題を強く訴える効果がある。

第三話の孟子の妻は、しかし、荅子の妻のように姑に対して孝養を尽すために七去を犯したわけではない。要するに、夫が自分に妻として接しないで他人扱いをする(妾を客とす)という不満をぶつけたに過ぎないが、妻としての感情がかえってストレートに表出している、『列女伝』の女性の中でも抜きん出ている。「夫婦の道、私室は与らず」と、婦人のプライバシーを主張するところなど、近代的

ですらある。

この説話は、孟子の妻の何らかの実像の一面を伝えているのかも知れない。『荀子』解蔽篇に、ほんの一句、「孟子、敗(く)んで妻を出だす」と見え、このような自己主張をする個性の強烈な女性は、当時の男性原理の支配する儒教倫理観に立てば、敗徳の女として世間では口さがなく罵られたにちがいないからである。

〈第四話〉

孟子 齊に処りて、憂色有り。孟母、之を見て曰く、「子、憂色有るが若し。何ぞや」と。孟子曰く、「不敏なり(愚かにも御心配かけましたがそうではありません)」と。異日、間居す。楹(はしら)を擁(いた)きて歎ず。孟母、之を見て曰く、「郷(さと)に子に憂色有るを見るに、不(い)と曰ふ。今、楹(はしら)を擁(いた)きて歎ずるは何ぞや」と。孟子、対(たい)へて曰く、「軻(か) 之を聞く、君子、身に称(な)ひて位に就けば、苟(い)も得ることを為さず、賞を受くるも、榮禄を貪(あ)らず。諸侯、聴(き)かざれば、則ち其の上(うへ)に達せず。聴(き)きて用(もち)ひられざれば、則ち其の朝を踐(つ)まず、と。今、道(みち) 齊(せい)に用(もち)ひられず。行(な)はん(君子の義を實行しよう)と願(ねが)へども、母、老(おい)ゆ。是(これ)を以て憂(うれ)ふるなり」と。孟母曰く、「夫れ婦人の礼、五飯に精(こ)し(五度のめしの仕度に励み)、酒漿(さか)を羈(お)ひ、舅姑(きゆうこ)を養(やし)ひ、衣裳(いさう)を縫(ぬ)ふのみ。故(ゆ)に閨内(けい)内(うち)庭(てい)の修(しゆ)め有りて境外(せうがい) (世間)の志(こころ)無し。易(やす)に曰(い)く、中饋(ちゆうけい) (炊事)に在(あ)り、遂(す)ぐる攸(とく) 无(な)し、と。詩(し)に曰(い)く、非(ひ) 無(な)く、儀(ぎ) 善(ぜん) 無(な)く、惟(ただ)酒食(しゆじき)を是(これ)れ議(は)か、と。以て婦人には擅制(せんせい)の義(ぎ)無くして、三従(さんじゆう)の道(みち)有るを言(い)ふなり。故(ゆ)に、年(とし) 少(せう)きときは則ち父母(ふぼ)に従(したが)ひ、

出でて嫁すれば則ち夫に従ひ、夫 死すれば則ち子に従ふは、礼なり。今、子は成人なり。而して我は老ゆ。子は子の義を行へ。吾は吾が礼を行はん」と。

君子謂ふ、孟母 婦道を知る。詩に云ふ、「すなは載ち色し、載ち笑ふ。怒にあら匪ず、教にあら匪ず」と。此の謂なり。

この話は他書には見えない。ただ、孟子が齊に居て去就に悩んだことが『孟子』公孫丑下篇に見えるから、劉向の筆がかなり入っているにしても、やはり何かもとなる説話に基いているのだろう。

この話の中で、孟母は、「婦人に擅制の義無く、三従の道有り」と言う。「三従の道」とは、「まだ嫁がず家に在るときは父に従ひ、嫁いだ後は夫に従ひ、夫の死後は子に従う」、つまり、女性とは一生涯、男性に服従すべき存在であると規定するものである。『儀礼』喪服伝に、「婦人には三従の義有りて専用の道無し」、『大戴礼記』本命篇に、「女とは如なり。……男子の教への如くす。……婦人とは、人に伏（服）するなり。是の故に専制の義無く、三従の道有り」、『白虎通』嫁娶篇に、「女とは如なり。従ひて人の如くにするなり。……伝に曰く、婦人に三従の義有りと」、他に『釈名』にも見え、繰り返し説かれているところである。字義のうえでも、「女」は、「如」で（訓詁の一つの方法で同音や近似音の字による解釈）、その意は、「男子の教への如くにする」、「従ひて人の如くにする」というものであり、また、「婦人」とは「人に伏（服）す」ものであり、女子・婦人は常に屈服して男子の命ずるままに従う存在であると、当時の道徳は説く。

ところが、第四話では女性の孟母が男性の孟子にこの三従の道を行おうよう要求し、命令しているのである。「忍従」というようなイメ

ージは全くなく、うじうじしているのは反対に孟子の方で、老いたる母をかかえて齊の禄を棄てるものかどうか、楹はしらによりかかって長嘆息する。孟母の方は昂然と、「子は子の義を行へ、吾は吾が礼を行はん」といつて胸をはっている。老いて嬰かくやく鑠たる母親が、壮年にして頼りない息子を叱咤しった激励するの図である。「三従の道」とは、「擅制の義無し」と常に表裏をなしており、女はいつも自立した生を生きることは許されないということのはずだったのに、ここでは母がかえって子に自立を促している。「老いては子に従う」を逆手にとつて、自分が従うに足るような大丈夫たらんことを、子に要求しているのである。孟母の頭の中では、「子の義」と「吾が礼」とは、主従の関係にあるのではなく、対等に同時に成立し得る体ていのものだったのである。

以上、「鄒孟軻母」を紹介してきたが、このように四話を通覧して得られる孟母像は、一面では、当然のことながら儒教道徳の代弁者である。第一話「孟母三遷」では、士大夫たるべく生れついたものの環境を論じて、墓掘り人足や大道商人のような下賤の者の行為と学校での儀礼実践者の行為とを峻別する。第二話「孟母断機」では、学問の中断を戒め、男子の務めは修徳に在ると説く。修徳を怠れば窃盗か虜役（下男）たるを免れないと説くのは、第一話とも合せて、『孟子』の「心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる」（滕文公上篇）という考えに一脈、通ずるところがある。第三話は礼儀の実践を説き、第四話は三従の道を説く。いずれも儒教道徳の高揚・發揮が劉向のねらいであることは一読して容易に諒解できる。

しかし、一面では、単なる儒教道德護持者としての硬直した思考ではなく、内に確固とした信念を持つ者が発散するエネルギーのよ
うなものを感じとることができるのである。儒教社会は守られねば
ならぬ、婦道は確立したものと提示されねばならぬという劉向
の頑固な信念が、このような孟母像をこしらえあげたのであろう。
かえってそれが道德の硬直化を救い、「三遷」の行動力や「断機」の
果敢な諭えを生み、更には、第三話の、夫婦間における妻の立場の主
張や、第四話の、三従の道を逆手にとって子に迫る老母の姿となっ
て、「孟母説話」はここに精彩を放ってよみがえったのである。

〈孟子三歳喪父説〉

さて、また第一話に戻る。「孟母三遷」の虚構性を指摘するのは清・
崔述『孟子事实録』巻上である。一つは、孟子のような大聖賢が幼少
のときには世間の凡児と異なるところが無かったという点、

人の相遠きは固より習ひに由る。然れども大聖賢の生るるや、
必ずや衆と異なるならん。必ずや尽くは流俗に随ひて転移する
を為さざらん。孟子 幼と雖も、安んぞ遂に市井・墟墓の群児と
以て異なること無きを得んや。

いま一つは、孟母の賢をもつてして、中間に市場の傍に住むとい
う錯誤を犯している点である。

且つ、孟母 既に墓側の居るべからざるを知れば、則ち何ぞ
即ちに学宮の旁を扞びて之に遷らずして、乃ち又、市側に卜居
するや。

そして崔述は結論として、このような古人讚嘆の物語を読むとき

はその虚構を見極めることが肝要であると、次のようにいう。

蓋し、凡そ古人を称する者は、極めて其の人の美を形容せん
と欲して、遂に復、其の事の乖けるを顧みざるは、其の通病の然
るなり。……孟母の善教を明らかにせんと欲して、遂に孟子の
初め毫も庸愚に異なる無きが若くす。其の実は、聖人の聖人た
ることも亦、必ず漸（順次の教化）に由りて成るも、聖人の幼時、
未だ即ちに聖人たらずと雖も、而れども亦、必ず流俗と同じか
らざるなり。善く書を読む者は、当に其の意の在る所を察して、
必ずしも尽くは以て実と為さざるべくして然るなり。

「当に其の意の在る所を察して」とは、『列女伝』の編纂意図を考
えよということであろう。劉向は、婦道を提示するため、敢へて虚構
に仕立て上げてその効果をねらったのである。このところを理解し
ないと、例えば唐・劉知幾が、「劉向は『列女伝』等の諸伝を造るに
及んで、広く虚事を陳べ、構偽の辞が多い」（『史通』巻六）と譏る
ことにもなるのである。

しかし、崔述のように、伝統的權威にとらわれず漢儒の説を疑っ
てかかる明確な視点を持っている人を除いては、この「孟母三遷」
は、かなりの信憑性を持って劉向以後の人々に受容されたらしく、
そこから「孟子幼時喪父」説が生れた。そもその初めは、文献の上
では後漢・趙岐である。趙岐は『孟子章句』という注釈書を作り、そ
の序に当る「孟子題辭」に次のように述べる。

孟子は鄒人なり。名は軻、字は則ち未だ聞かざるなり。鄒は
本、春秋の邾子の国、孟子の時に至り、改めて鄒と曰ふ。国魯
に近く、後、魯の并す所と為る。又、邾は楚の并す所と為り、魯

に非ずとも言ふなり。今の鄒峴、是れなり。或は曰く、孟子は魯の公族・孟孫の後、故に孟子 齊に仕へて母を喪ひ、歸りて魯に葬るなり。三桓の子孫 既に衰微するを以て、分れて他國に適く。

孟子 生れながらにして淑質有り。夙に其の父を喪ひ、慈母三遷の教へを被る。長じて孔子の孫・子思を師として儒術の道を治め、五經に通じ、尤も詩・書に通ず。

趙岐の叙述には、例えば、「字は則ち未だ聞かざるなり」と言うように、不詳なことは不詳なこととし、また、伝承のあやふやなもの、**「又、——とも言ふ」「或は曰く」**などとして参考とするにどめるなど、篤学者らしい明確な姿勢がある。後の魏・王肅『聖証論』には、突如として「軻 少くして坎軻(苦しい境遇)に居る。故に名は軻、字は子居」などと名の由来やら字まで出現したり、更に**明・陳鏞『闕里志』**には「孟子の父、名は激、字は公宜、仇氏を娶る」などと、遂には孟子の父や母の名姓まで出現するに至ったが、趙岐はそのようなものをこしらえ上げて後世の人を惑わすような学者ではない。

その趙岐が、「夙に其の父を喪ひ、幼くして慈母三遷の教へを被る」と明言しているというのは、「三遷」や「断機」の説話を信じて疑わなかったことからの帰納であろう。なお、趙岐が劉向の筆を信じこんだ一つの証拠として、「長じて孔子の孫・子思を師とす」というくだりを挙げておく。『史記』孟子荀卿列伝は、「孟軻は鄒人なり。業を子思の門人に受く」といい、子思・孟子の生卒年を詳細に検討した結果、孟子が子思に直接、学業を受けるのはかなり無理であり、子

思の門人に学んだという『史記』の記述が正しいということは、崔述の『孟子事實録』巻上や、清・梁玉繩『史記志疑』をはじめとして諸家の指摘するところである。それでは劉向が誤ったのかというと、劉向は、もちろん『史記』に基きつつも、おそらく故意に「門人」を削ってしまったのではなからうか。孟母の善教を受けて大儒の名を成す孟子の師としては、姓名不詳の「門人」よりは、孔子の孫・子思の方が、はるかに役柄にふさわしく効果的だからである。しかし、趙岐は、「其の意の在る所」を察ることができずにこれをそのまま踏襲した。趙岐ばかりではない。後漢の歴史家・班固も『漢書』芸文志の「孟子十一篇」の自注に、「名は軻、鄒人、子思の弟子」と書いているし、唐代の思想家・李翱の『復性書』上篇に、「子思は仲尼の孫、その祖の道を得て『中庸』四十七篇を述べ、それを孟子に伝えた」と述べている。

趙岐は、劉向の虚構を事実と信じたがために、「夙に其の父を喪ふ」と付け加えてしまった。しかし、ここにはまだ「三歳」で亡くなったとは書いていない。清・周広業『孟子出処時地考』によると、「孟子三歳喪父」説は、宋・薛昉『集語』、明・薛应旂『四書人物考』、明・陳鏞『闕里志』等より出ているという。また、民国・羅根沢『孟子伝論』によると、清・任兆麟『孟子時事略』、清・施彦士『讀孟質疑』、清・魏源『孟子年表』は、さらに「三歳喪父」の根拠・出典を『列女伝』に求め、「列女伝」に云ふ、孟子 三歳にして父を喪ふ」と、『列女伝』には存在しない字句を捏造してしまったのである。

では、事実はどうか。『列女伝』は劉向の虚構があつて事実を伝えているわけではないけれども、少くとも劉向自身は、「孟子幼時喪

父」の設定はしていないことは明らかである。そのことは、第二話、少年時の「孟母断機」で、孟母が「寧ろ能く其の夫子に衣せ云々」といつていることばによって分る（夫子は妻が夫をよぶときの呼称で、『列女伝』のなかでよく用いられている）。

孟子が父母を喪ったときのことを推定させる記述が『孟子』梁恵王下篇にある。魯・平公が当時、高名を馳せていた孟子に会いに出かけようとしたところ、寵臣・臧倉が、孟子の「後喪」は「前喪」を踰えてゐるから彼は賢者ではない、そのような者にお会いなさるなど譏った話が載っている。この箇所の趙岐注には、「孟子 前に父を喪ひて約、後に母を喪ひて奢」とあるから、つまり、先に亡くなった父の葬式が質素だったのに後で亡くなった母の葬式が贅沢に過ぎると、臧倉は譏ったわけである。これに対し、孟子の高弟・樂正子春は、「所謂踰ゆるに非ざるなり。貧富 同じからざればなり」と弁明する。趙岐注はこれを次のように説明する。「樂正子曰く、此れ父を薄くして母を厚くするに非ざるなり。母の喪 父を踰えしむるは、父を喪ふの時は士たり、母を喪ふの時は大夫たり、大夫は、禄 士よりも重し。故に然らしむるは貧富 同じからざればなり。孟子は、齊で卿相として時めいていた頃、母を喪い、盛大な葬式をとり行った後、郷里の魯領に帰って埋葬した（公孫丑下）。

このことから、孟子が父を喪ったのはまだ士の身分のときであることがわかり、周広業『孟子出処時地考』は、孟子四十歳の頃と推定する。その根拠は挙げていないけれども、『礼記』曲礼上篇の「四十を強と曰ひ、而して仕ふ」、あるいは内則篇の「四十、始めて仕ふ」などのことばを根拠にしているのかも知れない。

以上のように、趙岐は、『孟子章句』の本文の注では孟子の父の死亡を、孟子がまだ「士」の時、四十歳ごろと認識しているにもかかわらず、「孟子題辞」では「夙に其の父を喪ふ」といつて、彼れ此れ矛盾しており、これは、後者の筆がすべったとしか言いようがないであろう。周広業はこの矛盾を、「題辞の所謂『夙に其の父を喪ふ』なる者は、特に父、母に先んじて死せるを以てのみ。幼孤に非ざるなり」と趙岐のために弁解を試みているけれども、「題辞」では「夙に其の父を喪ふ」の文にすぐ続けて、「幼にして慈母三遷の教へを被る」とあり、この二句を全く切り離して解釈するのは無理であつて、「夙に喪ふ」とはやはり「幼孤」の身上を指すものと考えるべきであろう。

趙岐が「孟子題辞」の筆を執っていたとき、その悩裏には、『列女伝』の「孟母三遷」や「孟母断機」の母子像が、あまりにもくつきりと浮かんでいたのかも知れない。ために一たび筆をすべらせてより、孟子は遂に「三歳にして其の父を喪ふ」という幼孤の境遇に陥れられてしまったのである。

—「鄒孟軻母」の項終り—
(旭川分校)